

表 4- 41 (コ) 仕事が十分にできなくなる (子ども有無別)

(%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
子ども無	全体	433	21.9	33.0	27.5	17.6
	男性	243	9.1	17.7	44.0	29.2
	女性	190	38.4	52.6	6.3	2.6
子ども有	全体	758	15.7	32.3	25.2	26.8
	男性	278	2.9	12.9	33.1	51.1
	女性	480	23.1	43.5	20.6	12.7

子どもの有無 p&lt;.01 子ども無・男女 p&lt;.001 子ども有・男女 p&gt;.001

表 4- 42 (サ) 子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない (子ども有無別)

(%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
子ども無	全体	428	6.5	17.8	42.8	32.9
	男性	242	7.4	14.5	36.4	41.7
	女性	186	5.4	22.0	51.1	21.5
子ども有	全体	762	4.1	13.9	38.5	43.6
	男性	278	2.2	7.6	33.1	57.2
	女性	484	5.2	17.6	41.5	35.7

子どもの有無 p&lt;.01 子ども無・男女 p&lt;.001 子ども有・男女 p&gt;.001

表 4- 43 (シ) 社会から取り残されたような気になる (子ども有無別)

(%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
子ども無	全体	430	6.0	11.9	30.9	51.2
	男性	242	4.5	5.4	27.3	62.8
	女性	188	8.0	20.2	35.6	36.2
子ども有	全体	762	6.4	13.5	24.7	55.4
	男性	278	2.2	2.9	16.5	78.4
	女性	484	8.9	19.6	29.3	42.1

子どもの有無 n.s 子ども無・男女 p&lt;.001 子ども有・男女 p&gt;.001

## 4) 就業状態による違い

男性の無職者の実数が少ないので、比較をするには難があるが、男女ともに、有職、無職の場合に、どのような子産み・子育てにともなう負担感をいづく傾向にあるかを探ることにする(表 4-44 から表 4-49)。

まず、有職か無職かという違いと、子産み・子育てにともなう負担感との関連をみると、すべての項目において、無職者が有職者よりも負担感をいづく傾向にあることがわかる。このことは、無職者は女性が主流であり、有職者は男性が主流であり、性差とも対応する。

有職者においては、すべての項目で、女性が男性よりも、子産み・子育てにともなう負

担感が高くなっている。他方、無職者では、33名いる男性の回答傾向について、解釈しがたい。すなわち、「子育てによる心身の疲れが大きい」「子育てで出費がかさむ」「自分の自由な時間がもてなくなる」という負担感では、無職女性と有意差がなく、「仕事が十分にできなくなる」という負担感では、無職女性と比べて有意に低く、反対に、「子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない」という負担感は、無職女性よりも有意に高くなっている。また、「社会から取り残されたような気になる」という負担感は、無職女性よりも有意に低いのである。子産み・子育てにともなう負担感が、相対的に有職男性で最も低い傾向にあり、3項目において、無職男性で最も高いという点について、さらに検討が必要である。

表 4- 44 (キ) 子育てによる心身の疲れが大きい (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	872	19.7	40.8	26.4	13.1
	男性	508	14.8	39.2	29.3	16.7
	女性	364	26.6	43.1	22.3	8.0
無職	全体	351	30.5	39.6	21.9	8.0
	男性	33	33.3	33.3	24.2	9.1
	女性	318	30.2	40.3	21.7	7.9

就業状態 p<.001 有職・男女 p<.001 無職・男女 n. s.

表 4- 45 (ク) 子育てで出費がかさむ (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	872	42.1	42.9	10.2	4.8
	男性	507	40.0	41.4	12.8	5.7
	女性	365	44.9	44.9	6.6	3.6
無職	全体	350	43.7	47.1	6.9	2.3
	男性	33	57.6	36.4	3.0	3.0
	女性	317	42.3	48.3	7.3	2.2

就業状態 p<.05 有職・男女 p<.01 無職・男女 n. s.

表 4- 46 (ケ) 自分の自由な時間がもてなくなる (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	870	33.8	44.1	14.0	8.0
	男性	505	29.1	44.4	16.2	10.3
	女性	365	40.3	43.8	11.0	4.9
無職	全体	352	40.6	46.9	8.5	4.0
	男性	33	36.4	39.4	21.2	3.0
	女性	319	41.1	47.6	7.2	4.1

就業状態 p<.01 有職・男女 p<.001 無職・男女 n. s.

表 4- 47 (コ) 仕事が十分にできなくなる (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	874	15.1	26.8	29.7	28.4
	男性	508	5.3	15.2	38.8	40.7
	女性	366	28.7	42.9	17.2	11.2
無職	全体	347	25.6	46.4	17.9	10.1
	男性	33	12.1	15.2	42.4	30.3
	女性	314	27.1	49.7	15.3	8.0

就業状態 p<.001 有職・男女 p<.001 無職・男女 p<.001

表 4- 48 (サ) 子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	871	5.2	12.4	38.3	44.1
	男性	508	4.1	10.8	34.4	50.6
	女性	363	6.6	14.6	43.8	35.0
無職	全体	349	5.4	22.1	43.8	28.7
	男性	32	18.8	9.4	40.6	31.3
	女性	317	4.1	23.3	44.2	28.4

就業状態 p<.001 有職・男女 p<.001 無職・男女 p<.001

表 4- 49 (シ) 社会から取り残されたような気になる (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	871	4.2	7.9	27.0	60.8
	男性	508	3.0	3.9	21.9	71.3
	女性	363	6.1	13.5	34.2	46.3
無職	全体	351	11.4	25.1	27.6	35.9
	男性	32	6.3	9.4	25.0	59.4
	女性	319	11.9	26.6	27.9	33.5

就業状態 p<.001 有職・男女 p<.001 無職・男女 p<.05

## 5) 学歴による違い

学歴と子産み・子育てにともなう負担感との関連を、男女別々に検討することにした。

「子育てによる心身の疲れが大きい」という負担感は、男性では学歴との関連がみられないが、女性では、短大・高専で負担感が高くなっている (表 4-50)。「子育てで出費がかさむ」という負担感は、男女とも学歴との関連がみられない (表 4-51)。「自分の自由な時間がもてなくなる」という負担感は、男女ともに、学歴との関連はみられない (表 4-52)。

「仕事が十分にできなくなる」という負担感は、男性では学歴との関連がみられないが、女性では、短大・高専において、高くなっている (表 4-53)。「子育てが大変なことを身近

な人が理解してくれない」という負担感は、男女別でみると学歴との関連がみられない(表 4-54)。そして、「社会から取り残されたような気になる」という負担感、男性において低学歴ほど、負担感が高いという傾向がみられる(表 4-55)。

表 4- 50 (キ) 子育てによる心身の疲れが大きい (学歴別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性	全体	535	15.7	38.9	29.0	16.4
	中学・高校卒	240	14.2	39.6	30.0	16.3
	短大・高専	101	19.8	37.6	23.8	18.8
	大学以上	194	15.5	38.7	30.4	15.5
女性	全体	678	28.3	41.6	22.1	8.0
	中学・高校卒	297	23.6	40.7	25.3	10.4
	短大・高専	282	29.8	41.8	20.6	7.8
	大学以上	99	38.4	43.4	17.2	1.0

学歴 n. s. 男性・学歴 n. s. 女性・学歴 p<.01

表 4- 51 (ク) 子育てで出費がかさむ (学歴別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性	全体	534	41.0	41.0	12.4	5.6
	中学・高校卒	240	40.0	41.7	13.8	4.9
	短大・高専	101	46.5	35.6	11.9	5.9
	大学以上	193	39.4	43.0	10.9	13.0
女性	全体	678	43.8	46.3	6.9	2.9
	中学・高校卒	297	44.1	45.1	7.4	3.4
	短大・高専	281	43.4	46.6	7.5	2.5
	大学以上	100	44.0	49.0	4.0	3.0

学歴 n. s. 男性・学歴 n. s. 女性・学歴 n. s.

表 4- 52 (ケ) 自分の自由な時間がもてなくなる (学歴別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性	全体	532	29.3	44.2	16.5	10.0
	中学・高校卒	238	30.7	42.9	17.6	8.8
	短大・高専	101	28.7	48.5	12.9	9.9
	大学以上	193	28.0	43.5	17.1	11.4
女性	全体	680	40.6	45.6	9.3	4.6
	中学・高校卒	299	38.5	42.8	12.7	6.0
	短大・高専	282	41.5	48.9	6.4	3.2
	大学以上	99	44.4	44.4	7.1	4.0

学歴 p<.05 男性・学歴 n. s. 女性・学歴 n. s.

表 4- 53 (コ) 仕事が十分にできなくなる (学歴別) (%)

	N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性 全体	535	5.6	15.0	39.1	40.4
中学・高校卒	240	5.8	14.6	38.8	40.8
短大・高専	101	6.9	20.8	34.7	37.6
大学以上	194	4.6	12.4	41.8	41.2
女性 全体	676	27.8	46.2	16.3	9.8
中学・高校卒	298	25.5	42.3	18.1	14.1
短大・高専	280	28.9	48.9	15.4	6.8
大学以上	98	31.6	50.0	13.3	5.1

学歴 p<.001 男性・学歴 n. s. 女性・学歴 p<.05

表 4- 54 (サ) 子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない (学歴別) (%)

	N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性 全体	534	5.1	10.9	35.0	49.1
中学・高校卒	240	6.3	12.9	34.6	46.3
短大・高専	100	4.0	11.0	41.0	44.0
大学以上	194	4.1	8.2	32.5	55.2
女性 全体	676	5.3	18.8	43.9	32.0
中学・高校卒	296	6.8	18.2	41.6	33.4
短大・高専	282	5.0	19.1	44.7	31.2
大学以上	98	2.0	19.4	49.0	29.6

学歴 n. s. 男性・学歴 n. s. 女性・学歴 p<.01

表 4- 55 (シ) 社会から取り残されたような気になる (学歴別) (%)

	N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性 全体	534	3.2	4.1	22.1	70.6
中学・高校卒	240	4.2	5.0	22.9	67.9
短大・高専	100	4.0	5.0	31.0	60.0
大学以上	194	1.5	2.6	16.5	79.4
女性 全体	678	8.7	19.8	31.3	40.3
中学・高校卒	297	7.1	16.2	31.0	45.8
短大・高専	282	9.6	23.0	30.5	36.9
大学以上	99	11.1	21.2	34.3	33.3

学歴 p<.001 男性・学歴 p<.05 女性・学歴 n. s.

## 6) 子産み・子育てにともなう負担：小括

①子産み・子育ての負担感は、すべての項目において、男性よりも女性が高くなっている。とはいえ、②子産み・子育ての負担感が、有配偶者よりも無配偶者において、また、子どものいる人よりも子どものいない人のほうが高いことが特徴である。

有配偶、有職、子どものいる男性の負担感が相対的に低く、他方、無配偶、無職、子どものいない男性、および、女性の負担感が高いと言える。

### (3) 親としての社会的責任

子産み・子育てに関わる意識として、親としての社会的責任感について、性差を検討する。親としての社会的責任感を問う質問項目として、ここでは、子産み・子育てについて「親としての重い責任を感じる」かどうか、そして、「児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ」と思うかどうか、という2項目を用いることにする。

#### 1) 男女の違い

子産み・子育てについて「親として重い責任を感じる」かどうかでは、男女差はみられない(表4-56)。しかし、「児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ」という意識では、男性が女性よりも責任を感じる傾向にあるようだ(表4-57)。

表4-56 親としての重い責任を感じる (％)

	N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
全体	1227	79.1	17.5	1.9	1.5
男性	543	78.3	18.2	1.5	2.0
女性	684	79.8	17.0	2.2	1.0

男女 n. s.

表4-57 児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ (％)

	N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
全体	1230	46.1	46.5	5.0	2.4
男性	545	51.4	40.7	5.1	2.8
女性	685	41.9	51.1	5.0	2.0

男女差 p<.01

## 2) 配偶状態による違い

親としての責任感が、有配偶と無配偶とで差があるか検討したのが、表 4-58 と表 4-59 である。

それによると、「親として重い責任を感じる」かどうかは、配偶状態によって、有意差はみられなかった。また、有配偶も無配偶も、男女差はなかった。

「児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ」という意識は、有配偶の方が無配偶者よりも有意に高く、また、有配偶者のなかでは、男性が女性よりも有意に高かった。しかし、無配偶者では、男女の有意差はなかった。

表 4-58 親としての重い責任を感じる (配偶状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有配偶	全体	860	79.8	17.3	1.7	1.2
	男性	344	78.8	18.0	1.5	1.7
	女性	516	80.4	16.9	1.9	0.8
無配偶	全体	367	77.7	18.0	2.2	2.2
	男性	199	77.4	18.6	1.5	2.5
	女性	168	78.0	17.3	3.0	1.8

配偶状態 n. s. 有配偶・男女 n. s. 無配偶・男女 n. s.

表 4-59 児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ (配偶状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有配偶	全体	861	47.5	46.7	4.2	1.6
	男性	344	53.2	41.3	3.5	2.0
	女性	517	43.7	50.3	4.6	1.4
無配偶	全体	369	42.8	46.1	7.0	4.1
	男性	201	48.3	39.8	8.0	4.0
	女性	168	36.3	53.6	6.0	4.2

配偶状態 p<.01 有配偶・男女 p<.05 無配偶・男女 n. s.

## 3) 子どもの有無による違い

子どもの有無との関連をみると、「親としての重い責任を感じる」かどうかとの関連はみられない (表 4-60)。しかし、「児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ」という意識は、子どものいない男女間で有意差があり、男性が女性よりも有意に高い (表 4-61)。

表 4-60 親としての重い責任を感じる (子ども有無別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
子ども無	全体	435	77.5	18.6	1.4	2.5
	男性	244	76.2	19.7	0.8	3.3
	女性	191	79.1	17.3	2.1	1.6
子ども有	全体	761	80.2	16.8	2.1	0.9
	男性	278	80.6	16.5	1.8	1.1
	女性	483	79.9	17.0	2.3	0.8

子どもの有無 n.s. 子ども無・男女 n.s. 子ども有・男女 n.s.

表 4-61 児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ (子ども有無別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
子ども無	全体	440	43.4	46.6	6.4	3.6
	男性	248	49.2	40.3	6.0	4.4
	女性	192	35.9	54.7	6.8	2.6
子ども有	全体	760	47.5	46.7	4.1	1.7
	男性	276	53.6	41.3	3.6	1.4
	女性	484	44.0	49.8	4.3	1.9

子どもの有無 p<.05 子ども無・男女 p<.05 子ども有・男女 n.s.

#### 4) 就業状態による違い

就業状態と親としての責任感との関連についてみると、「親として重い責任がある」かどうかは、有職の場合も無職の場合も、男女差はみられない (表 4-62)。そして、「児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ」という意識については、有職者について男女差はなく、無職者については、男性が女性よりも有意に高くなっている (表 4-63)。

表 4-62 親としての重い責任を感じる (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	876	77.4	18.8	1.8	1.9
	男性	510	77.6	18.8	1.4	2.2
	女性	366	77.0	18.9	2.5	1.6
無職	全体	351	83.5	14.2	2.0	0.3
	男性	33	87.9	9.1	3.0	-
	女性	318	83.0	14.8	1.9	0.3

就業状態 p<.05 有職・男女 n.s. 無職・男女 n.s.



表 4- 63 児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ (就業状態別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
有職	全体	877	47.1	45.0	5.2	2.6
	男性	512	50.4	42.0	4.9	2.7
	女性	365	42.5	49.3	5.8	2.5
無職	全体	353	43.6	50.1	4.5	1.7
	男性	33	66.7	21.2	9.1	1.0
	女性	320	41.3	53.1	4.1	1.6

就業状態 n. s. 有職・男女 n. s. 無職・男女 p<.01

### 5) 学歴による違い

学歴と親としての責任感との関連は、両方の項目ともみられなかった(表 4-64、4-65)。そのなかで、男性の場合のみ、学歴が高くなるほど、「親としての重い責任を感じる」という意識が高くなる傾向がみられる。

表 4- 64 親としての重い責任を感じる (学歴別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性	全体	537	78.2	18.4	1.3	2.0
	中学・高校卒	242	72.3	23.6	2.1	2.1
	短大・高専	101	79.2	17.8	2.0	1.0
	大学以上	194	85.1	12.4		5.0
女性	全体	680	79.7	17.1	2.2	1.0
	中学・高校卒	298	78.2	17.8	2.7	1.3
	短大・高専	282	80.9	16.0	2.1	1.1
	大学以上	100	81.0	18.0	1.0	

学歴 n. s. 男性・学歴 p<.05 女性・学歴 n. s.

表 4- 65 児童や生徒が犯罪や非行を犯した場合、親の責任が問われるべきだ (学歴別) (%)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
男性	全体	538	51.7	40.7	4.8	2.8
	中学・高校卒	244	50.4	40.6	6.6	2.5
	短大・高専	99	56.6	34.3	4.0	5.1
	大学以上	195	50.8	44.1	3.1	2.1
女性	全体	681	41.6	51.4	5.0	2.1
	中学・高校卒	303	42.2	49.5	5.6	2.6
	短大・高専	279	42.3	52.0	3.9	1.8
	大学以上	99	37.4	55.6	6.1	1.0

学歴 n. s. 男性・学歴 n. s. 女性・学歴 n. s.

## 6) 親としての社会的責任：小括

親としての責任感を問う項目のうち、「親として重い責任を感じる」という意識は性差がみられなかったが、「児童や生徒が犯罪や非行を犯す場合、親の責任が問われるべきだ」という意識は性差がみられたので、親としての責任感に男女差があるかどうか結論づけることはできない。有配偶者は無配偶者よりも、また、子どもがいる場合には子どもがいない場合よりも親としての責任感が高い傾向にあるかという点、一概に言えない。

(神原文子)

## 5章 子産み・子育てを担うカップルの夫婦関係

本章では、現在、子産み・子育てを担っているカップルを対象にその夫婦関係を、家事の遂行状況、配偶者の家庭生活への取り組み方や分担等についての評価、トラブルや揉め事、心理的サポートからみていく。具体的な対象は、28歳から37歳までの既婚者、男性347名、女性520名である。

### (1) 家事の遂行状況

本調査では、本人の家事や育児の遂行状況のみでなく、配偶者のそれについての評価も同時に尋ねている。たとえば、男性対象者（夫）には妻の家事や育児に対する評価を、女性対象者（妻）には夫の家事や育児に対する評価を尋ねている。分析の結果、男性対象者による配偶者（妻）評価と女性回答者による本人（妻）の遂行状況、および女性対象者による配偶者（夫）評価と男性対象者による本人（夫）の遂行状況との間に大きな隔たりは認められなかった。そこで以下では、女性対象者による配偶者評価と男性対象者による本人の遂行状況とを合わせて「夫」の家事遂行、男性対象者による配偶者による本人の遂行状況とを「妻」の家事遂行として分析していく。

表5-1～表5-5にあるように、従来の調査結果と同様、比較的若いカップルにおいても家事のほとんどを妻が行っている。育児に関しては、子どもの身の回りの世話は妻がそのほとんどを行っている（表5-7）が、子どもと遊ぶことに関しては24.6%の夫が毎日行っており、子どもと遊ぶことに関しては夫がある程度参加している傾向がうかがわれる（表5-6）。しかしながら総じて、比較的年齢が若い既婚カップルでも、夫の家事参加はさほど活発であるとは言えない。

表5-1 食事の用意 (%)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない
夫	850	1.8	1.5	5.8	15.5	75.4
妻	865	86.6	7.7	3.7	1.3	0.7

夫対妻： $\chi^2(16)=186.22, p<.01, N=848$

表5-2 食事のあとかたづけ (%)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない
夫	854	4.6	2.9	10.4	17.7	64.4
妻	865	87.1	6.8	4.6	0.9	0.6

夫対妻： $\chi^2(16)=175.15, p<.01, N=852$

表 5- 3 食料品や日用品の買物 (％)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない
夫	854	0.7	1.6	13.0	44.1	40.5
妻	864	31.3	17.9	39.6	10.3	0.9

夫対妻： $\chi^2(16)=115.44$ ,  $p<.01$ ,  $N=851$

表 5- 4 洗濯 (％)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない
夫	848	2.6	1.4	4.8	9.9	81.3
妻	863	73.9	10.9	12.1	1.6	1.5

夫対妻： $\chi^2(16)=176.48$ ,  $p<.01$ ,  $N=845$

表 5- 5 そうじ (部屋、風呂、トイレなど) (％)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない
夫	849	1.9	2.5	7.5	25.3	62.8
妻	864	49.9	17.2	20.7	11.0	1.2

夫対妻： $\chi^2(16)=103.62$ ,  $p<.01$ ,  $N=846$

表 5- 6 子どもと遊ぶこと (％)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない	子どもは いない
夫	856	24.6	7.5	23.4	22.8	6.5	15.2
妻	862	66.4	5.9	7.9	3.2	1.5	15.1

夫対妻： $\chi^2(16)=134.33$ ,  $p<.01$ ,  $N=723$

検定は「子どもはいない」を除外して行った。

表 5- 7 子どもの身の回りの世話 (％)

	N	ほぼ毎日	1週間に 4-5回	1週間に 2-3回	週に1回 くらい	ほとんど 行わない	子どもは いない
夫	852	16.1	6.0	19.2	20.7	22.8	15.3
妻	862	82.3	1.2	0.7	0.3	0.5	15.1

夫対妻： $\chi^2(16)=17.82$ ,  $n. s.$ ,  $N=719$

検定は「子どもはいない」を除外して行った。

(2) 配偶者の家庭生活への取り組み方や分担等の評価

表 5-8～表 5-13 のように、すべての項目で妻（女性対象者）の評価が夫（男性対象者）よりも有意に低い。特に「家事に対する配偶者の取り組み方」については、夫と妻の差異が大きい。結婚生活の各側面における満足度の違いが、夫婦関係全体に対する満足度における差異を生み出している可能性が考えられる。

表 5- 8 育児や子育てに対する、配偶者の取り組み方について (%)

	N	かなり満足	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	かなり不満	子どもはいない
全体	862	24.8	42.3	13.0	4.6	15.2
夫	345	37.1	36.5	4.1	0.6	21.7
妻	517	16.6	46.2	19.2	7.4	10.8

夫対妻： $\chi^2(3)=95.22, p<.01$

検定は「子どもはいない」を除外して行った。

表 5- 9 あなたの親に対する、配偶者の接し方について (%)

	N	かなり満足	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	かなり不満	親はいない
全体	819	31.0	50.5	12.8	2.9	2.7
夫	318	40.3	48.1	8.8	0.6	2.2
妻	501	25.1	52.1	15.4	4.4	3.0

夫対妻： $\chi^2(3)=30.78, p<.01$

検定は「親はいない」を除外して行った。

表 5- 10 家事に対する、配偶者の取り組み方について (%)

	N	かなり満足	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	かなり不満
全体	854	24.1	45.9	23.2	6.8
夫	340	43.2	47.4	9.1	0.3
妻	514	11.5	44.9	32.5	11.1

夫対妻： $\chi^2(3)=169.15, p<.01$

表 5- 11 家計の分配や管理・運営について (%)

	N	かなり満足	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	かなり不満
全体	854	25.8	52.8	16.4	5.0
夫	342	36.5	52.0	10.8	0.6
妻	512	18.6	53.3	20.1	8.0

夫対妻： $\chi^2(3) =59.09, p<.01$

表 5- 12 性生活について (％)

	N	かなり満足	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	かなり不満
全体	816	15.0	60.4	20.2	4.4
夫	333	20.7	54.1	20.4	4.8
妻	483	11.0	64.8	20.1	4.1

夫対妻： $\chi^2(3)=16.50$ ,  $p<.01$

表 5- 13 夫婦関係全体について (％)

	N	かなり満足	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	かなり不満
全体	848	31.4	54.4	10.5	3.8
夫	341	44.3	48.4	6.5	0.9
妻	507	22.7	58.4	13.2	5.7

夫対妻： $\chi^2(3)=55.61$ ,  $p<.01$

### (3) この1年間にあったトラブルや揉め事

過去1年間にあったトラブルや揉め事に関しては、妻の認知度が夫より有意に高い。満足度分野における妻の評価の低さと考え合わせると、問題の認知そのものに関して夫婦間に差異があるのだろう(表 5-14)。日本における性別役割分業から来るジェンダー間の認知の違いと言えるかもしれない。

表 5- 14 1年間にあったトラブルや揉め事 (％)

	N	何度もあった	時々あった	まれにあった	なかった
全体	861	9.4	26.1	32.6	31.8
夫	343	8.5	24.5	29.7	37.3
妻	518	10.0	27.2	34.6	28.2

夫対妻： $\chi^2(3)=8.02$ ,  $p<.05$

### (4) 心理的サポート

結婚生活の各分野における満足度が、妻のほうが夫より低く、トラブルや揉め事の認知は妻のほうが夫より多い。それでは心理的サポートに関しては、どのような傾向が認められるのだろうか。表 5-15～表 5-17 の3種類の心理的サポートに関しては、全ての項目について、妻が夫から受けているサポート量は夫が妻から受けているサポート量よりも少ない。この結果も従来の調査結果と一貫している。これらの分析結果から、一般的に結婚生

活が夫にとっては居心地のよいものであるが、妻にとってはそれほど居心地によいものではないことを示していると言えよう。

表 5- 15 配偶者（夫・妻）は、わたしの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる (%)

	N	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない
全体	866	49.7	36.5	10.4	3.5
夫	347	57.3	32.3	18.1	2.3
妻	519	44.5	39.3	11.9	4.2

夫対妻： $\chi^2(3)=14.97$ ,  $p<.01$

表 5- 16 配偶者（夫・妻）は、わたしの能力や努力を高く評価してくれる (%)

	N	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない
全体	866	32.9	44.6	17.1	5.4
夫	347	46.7	38.0	11.5	3.7
妻	519	23.7	48.9	20.8	6.6

夫対妻： $\chi^2(3)=52.43$ ,  $p<.01$

表 5- 17 配偶者（夫・妻）は、わたしに助言やアドバイスをしてくれる (%)

	N	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない
全体	866	40.8	39.6	15.0	4.6
夫	347	47.0	37.8	12.1	3.2
妻	519	23.7	48.9	20.8	6.6

夫対妻： $\chi^2(3)=11.88$ ,  $p<.01$

## (5) 小括

若年既婚カップルの夫婦関係を、家事の遂行状況、配偶者の家庭生活への取り組み方や分担等についての評価、トラブルや揉め事、心理的サポートからみてきた。本分析から、夫の家事参加は活発ではないこと、結婚生活の各側面における満足度で、妻の評価が夫よりも有意に低いこと、特に「家事に対する配偶者の取り組み方」は顕著であることが明らかになった。総じて、一般的に結婚生活が夫にとっては居心地のよいものであるが、妻にとってはそれほど居心地によいものにはなっていないことが示唆される。

(土倉玲子)

## 6章 若年成人層がかかえる家族と仕事に関する悩み・葛藤

### (1) 家族員に関する悩み

本調査では家族員に関する悩みを、「子どものこと」、「配偶者のこと」、「親・義理の親のこと」にわけて尋ねている。表 6-1～表 6-3 は配偶状態別および有配偶・無配偶の男女別の割合を示す（「配偶者のこと」については有配偶者のみ）。

表 6-1 の「子どものこと」については、回答が4つの選択肢に比較的散らばる傾向がみられる。有配偶者の中では男性よりも女性の方が、子どものことについて悩んだ頻度が高い。無配偶者についてはサンプル数が少ないため、はっきりとした傾向をつかむことが困難であるが、「何度もあった」と「ときどきあった」に回答が偏る傾向があり、その傾向は特に女性において強い。

表 6-2 の「配偶者のこと」については、回答は「ごくまれにあった」と「まったくなかった」に偏る傾向がみられる。性別による差が有意であり、男性よりも女性の方が配偶者のことで悩んだ頻度が高い。

表 6-3 の「親・義理の親のこと」についても、回答は「ごくまれにあった」と「まったくなかった」に偏っている。配偶状態別の差が有意であり、無配偶者よりも有配偶者の方が親のことで悩んだ頻度が高い。有配偶者の中では性別による差が有意であり、男性よりも女性の方が親のことで悩んだ頻度が高い。一方無配偶者については、性別による差は有意ではない。

表 6- 1 (ア) 子どものことで悩んだこと (%)

	N	何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった
有配偶 全体	732	16.1	29.5	36.2	24.2
男性	271	5.2	24.4	29.2	41.3
女性	461	22.6	32.5	30.8	14.1
無配偶 全体	28	35.7	35.7	17.9	10.7
男性	7	28.6	-	42.9	28.6
女性	21	38.1	47.6	9.5	4.8

有配偶・男女 p<.001

表 6- 2 (イ) 配偶者のことで悩んだこと (%)

	N	何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった
有配偶 全体	864	7.5	16.2	24.5	51.7
男性	346	4.0	10.7	19.9	65.3
女性	518	9.8	19.9	27.6	42.7

有配偶・男女 p<.001



表 6-3 (ウ) 親・義理の親のことで悩んだこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	855	7.7	13.9	22.9	55.4
	男性	341	3.5	9.1	18.8	68.6
	女性	514	10.5	17.1	25.7	46.7
無配偶	全体	357	4.8	14.6	15.1	65.5
	男性	195	4.6	13.8	15.4	66.2
	女性	162	4.9	15.4	14.8	64.8
配偶状態		p<.01	有配偶・男女	p<.001	無配偶・男女	n.s.

(2) 家族生活に関する悩み

家族生活に関する悩みは、「『自分が家族に理解されない』と感じたこと」、「家事・育児・介護などでの負担が大きすぎると感じたこと」、「家計の先行きについて不安を感じたこと」の3項目で測定されている。表 6-4～表 6-6 は配偶状態別および有配偶・無配偶の男女別の割合を示している。

表 6-4 を見ると「『自分が家族に理解されていない』と感じたこと」については、配偶状態および性別を問わず6～7割が「まったくなかった」と回答している。つまり全体的に調査対象者が「家族に理解されない」と感じている頻度は低いとみられる。配偶状態による差は有意ではない。有配偶者については性別による差が有意であり、男性よりも女性の方が「家族に理解されない」と感じた頻度が高い。一方無配偶者については性別による差は有意ではない。

次に表 6-5 の「家事・育児・介護などでの負担が大きすぎると感じたこと」については、全体としては回答は「まったくなかった」に偏っているが、回答の散らばり方は配偶状態や性別によって異なっている。まず配偶状態による差に注目すると、無配偶者よりも有配偶者のほうが「家事・育児・介護などでの負担が大きすぎる」と感じた頻度が高い。さらに有配偶者の中でも、男性よりも女性の方が負担が大きすぎると感じた頻度が高い。性別による差は無配偶者においても有意であり、無配偶者においても男性よりも女性の方が、負担が大きすぎると感じた頻度が高い傾向が見られる。

表 6-6 の「家計の先行きについて不安を感じたこと」についての回答は、先の2つの項目に比べると、4つの選択肢に比較的散らばっている。配偶状態別、性別のすべてのカテゴリーを通して「何どもあった」と回答が1～2割前後を占めている。配偶状態別の差は統計的に有意で、無配偶者よりも有配偶者のほうが家計の先行きについての不安を高い頻度で感じている。有配偶者の中では性別による差がみられ、男性よりも女性の方が不安を感じた頻度が高い。他方無配偶者については、性別による差はみられない。

表 6- 4 (エ) 「自分が家族に理解されていない」と感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	863	4.6	11.9	18.4	65.0
	男性	347	3.7	8.4	14.7	73.2
	女性	516	5.2	14.3	20.9	59.5
無配偶	全体	371	5.7	10.0	15.6	68.7
	男性	202	5.0	9.9	13.4	71.8
	女性	169	6.5	10.1	18.3	65.1
配偶状態		n. s.	有配偶・男女	p<.01	無配偶・男女	n. s.

表 6- 5 (オ) 家事・育児・介護などでの負担が大きすぎると感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	864	6.7	13.2	20.8	59.3
	男性	346	0.9	4.6	9.5	85.0
	女性	518	10.6	18.9	28.4	42.1
無配偶	全体	361	3.3	4.2	9.7	82.8
	男性	196	4.1	1.5	6.1	88.3
	女性	165	2.4	7.3	13.9	76.4
配偶状態		p<.001	有配偶・男女	p<.001	無配偶・男女	p<.01

表 6- 6 (カ) 家計の先行きについて不安を感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	864	19.0	17.6	27.9	35.5
	男性	346	11.6	14.5	28.3	45.7
	女性	518	23.9	19.7	27.6	28.8
無配偶	全体	363	11.0	17.4	27.8	43.8
	男性	198	11.6	14.6	28.8	44.9
	女性	165	10.3	20.6	26.7	42.4
配偶状態		p<.01	有配偶・男女	p<.001	無配偶・男女	n. s.

### (3) 仕事に関する悩み

仕事に関する悩みを尋ねる項目は、「職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと」、「職場や仕事上で『自分が理解されていない』と感じたこと」の2項目である。表 6-7、表 6-8 に配偶状態別および有配偶・無配偶の男女別の割合を示す。

表 6-7 の「職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと」は、配偶状態別、性別のすべてのカテゴリーを通して、1割前後が「何度もあった」と回答し、4割前後が「まったくなかった」と回答している。配偶状態別の差は有意ではない。有配偶者については性別による差が有意で、女性よりも男性の方が負担を感じた頻度が高い。無配偶者については、性別による差は有意ではない。

次の表 6-8 の「職場や仕事上で『自分が理解されていない』と感じたこと」については、配偶状態別、性別のすべてのカテゴリーを通して、5割前後が「まったくなかった」と回答している。他方「何度もあった」という回答はどのカテゴリーでも1割に満たない。配偶状態別の差は有意ではない。また有配偶者、無配偶者とも性別による差も有意ではない。

表 6- 7 (キ) 職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	555	14.1	16.4	26.5	43.1
	男性	345	17.4	16.8	25.8	40.0
	女性	210	8.6	15.7	27.6	48.1
無配偶	全体	325	12.3	18.5	29.5	39.7
	男性	174	13.2	16.7	25.9	44.3
	女性	151	11.3	20.5	33.8	34.4
配偶状態		n. s.	有配偶・男女	p<.05	無配偶・男女	n. s.

表 6- 8 (ク) 職場や仕事上で「自分が理解されていない」と感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	555	6.7	10.8	27.9	54.6
	男性	345	8.1	11.3	28.4	52.2
	女性	210	4.3	10.0	27.1	58.6
無配偶	全体	326	6.7	16.3	24.5	52.5
	男性	175	8.0	14.9	22.9	54.3
	女性	151	5.3	17.9	26.5	50.3
配偶状態		n. s.	有配偶・男女	n. s.	無配偶・男女	n. s.

#### (4) 家族と仕事の葛藤

家族と仕事の葛藤は、「仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと」、「家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと」の2項目で測定されている。表 6-9、表 6-10 に配偶状態別、および有配偶・無配偶の男女別の割合を示す。

表 6-9 の「仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと」については、まず配偶状態別の差が明瞭である。その差は統計的に有意で、無配偶者よりも有配偶者の方が「仕事のために家族との時間がとれない」と感じた頻度が高い。また有配偶者の中では性別による差が有意である。女性よりも男性の方が「仕事のために家族との時間がとれない」と感じた頻度が高い。無配偶者については性別による差は有意ではない。

次に表 6-10 の「家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと」を見ると、先の表 10 に比べて「何度もあった」という回答の割合が少なく、「まったくなかった」という回答の割合が高いことがわかる。つまり仕事のために家族との時間がとれないと感じた頻度は、家族のために仕事の時間がとれないと感じた頻度よりも高い。また配偶状態別、性別の各カテゴリーを通して、「家族のために仕事の時間がとれない」と感じたことが「まったくなかった」という回答が 7～9 割に達しており、全体的に見て家族のために仕事の時間がとれないと感じた頻度は非常に低い。「家族のために仕事の時間がとれない」と感じた頻度は、配偶状態によって差があり、無配偶者よりも有配偶者のほうが葛藤を感じる頻度が高い。有配偶者については性別による差が有意であり、男性よりも女性の方が葛藤を感じる頻度が高い。無配偶者については性別による差は有意ではない。

表 6-9 (ケ) 仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	555	20.2	17.7	24.5	37.7
	男性	345	24.3	15.7	27.2	32.8
	女性	210	13.3	21.0	20.0	45.7
無配偶	全体	325	8.0	11.7	13.2	67.1
	男性	174	9.2	9.2	13.2	68.4
	女性	151	6.6	14.6	13.2	65.6
配偶状態		p<.001	有配偶・男女	p<.001	無配偶・男女	n. s.

表 6-10 (コ) 家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと (%)

		N	何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
有配偶	全体	555	2.9	5.4	14.1	77.7
	男性	345	1.4	4.9	12.8	80.9
	女性	210	5.2	6.2	16.2	72.4
無配偶	全体	325	2.2	2.8	6.8	88.3
	男性	174	3.4	2.3	8.0	86.2
	女性	151	0.7	3.3	5.3	90.7
配偶状態		p<.001	有配偶・男女	p<.05	無配偶・男女	n. s.